慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロバート・オウエンとウィリアム・ゴドウィン（下）
Sub Title	Robert Owen and William Godwin (III)
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.12 (1966. 12) ,p.1385(21)- 1408(44)
JaLC DOI	10.14991/001.19661201-0021
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661201-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(25) 圧力集団の歴史と概況については次の文献を参照、飯田収治・他、前掲書、一七二―一七五頁および二五八―二六三頁、および Brady, Robert A., *Business as a System of Power*, New York 1947, p. 23 sq.

(26) Neumann, Sigmund, *Die Parteien der Weimarer Republik*, Stuttgart 1965, S. 63.

(27) *Ibid.*, S. 99.

(28) Neumark, Fritz, *Der Reichshaushaltsplan*, Jena 1929, S. 102.

(29) *Ibid.*, S. 103.

(30) *Ibid.*, S. 109.

(31) Schmölders, Günter, *Finanzpolitik*, 2. neubearbeitete Aufl., Berlin 1965, S. 92.

(32) Raab, Friedrich, *Die Entwicklung der Reichsfinanzen seit 1924*, Berlin 1929, S. 33.

(33) Neumark, F., *op. cit.*, S. 101.

(34) Schmölders, G., *op. cit.*, S. 92.

(35) Neumann, S., *op. cit.*, S. 109.

(36) 栗原優、「ブリューニングの経済政策」、『歴史学研究』、一九六四年一一月、二九四号、一四頁以下参照。

(37) 飯田収治・他、前掲書、二六九頁以下参照。

(38) Bracher, Karl Dietrich, *Die Auflösung der Weimarer Republik*, Villingen/Schwarzwald 1960, 3. verbesserte und ergänzte Aufl., S. 179.

(39) Luther, H., *op. cit.*, S. 295 sq.

(40) シグマンド・ノイマン（岩永健吉郎・他訳）、『大衆国家と独裁』、一四一頁。

(41) Hoffmann, Wolfgang, *Die öffentlichen Gelder im Deutschen Reich*, Berlin 1929, 参照。

(42) Brecht, Arnold, *Federalism and Regionalism in Germany*, New York 1945, p. 65.

(43) このような問題意識は、その基本的な点において、現代政治史の分析に関する篠原一教授の方法論的問題提起に負うものである。（篠原一、『現代の政治力学』、二八頁以下）それは、現代政治史の分析の「キイ概念」として、「決定作成」と「相互作用」を内容とする「政治過程」をとりあげようとするものであった。財政現象と政治現象の性格の相異を無視して、単純な類比を行うことが許されないことは自明であるが、「歴史分析をダイナミックにまた立体的にする」ための方法論的問題提起として、それはわれわれにとっても重要である。

(44) Popitz, Johannes, *Der Finanzausgleich*, Veröffentlichungen des Reichsverbandes der Deutschen Industrie, Sonderheft 3, Berlin 1930, S. 6.

ロバート・オウエンとウィリアム・ゴドウィン（下）

白井厚

一、オウエンの思想形成

二、「新社会観」における性格形成原理

(1) 性格形成原理の基本性格

(2) 環境論による社会批判

a、経済批判　b、法律・刑罰批判

c、宗教批判　d、国家観

(3) 利己心・盲目的利潤追求批判

(4) 教育論、生産と教育の結合

（以上五八巻一号）

三、協同社会主義への成長

(1) 二人の出会い

(2) 「工場制度の影響に関する考察」

(3) 「ニュー・ラナーク住民への講演」

（以上五八巻二号）

四、「ラナーク州への報告」における協同社会主義

(1) 基本構想

(2) ブルジョア的性格

(3) ゴドウィン的性格

a、ゴドウィンのユートウピア

b、オウエンのユートウピアとの共通性

c、両者の相違と影響関係

（以上本号）

四、「ラナーク州への報告」における協同社会主義

(1) 基本構想

ナポレオン戦争の終結に伴う過渡的恐慌の原因と救済策について、オウエンは下院の委員会に、「工場労働貧民救済委員会への報告」（一八一七年）を提出した。ここにおいて彼は、貧窮の原因を機械の導入による労働力の価値低下とし、失業労働者に職を与え、機械を労働者追放のためにではなく労働者に奉仕する手段とすることを訴え、そのために理想的な協同村の計画を示した。そしてあの二回目のシティ・オヴ・ロンドン・タヴァーン集会での講演において、人びとの心に不寛容と分裂をもたらす全宗教を否定し、協同化の利益を数え、協同村の統治制度を示し、この村が実験されることを期待する。これらは資本主義を一挙に否定するものではなく、あくまでも実験ではあるが、資本主義の基礎原理を否定する実験なのである。こうして彼は、この年を機に、一事業家から社会主義者へと転身した。

一八一九年には、再び恐慌が発生して何万もの人が失業し、小売商人が破産したが、ひとりニュー・ラナークにおいては、賃下げも失業も窮乏も苦情も存在しなかった。オウエンは、ラナーク州の大集会においてそれについての彼の見解を述べ、さらにこの窮乏についての効果的な救済策を示すように州当局に求められて書いたのが、「ラナーク州への報告」（一八二一年）である。ところがこれは、現実の救済策という内容をはるかに越えて、窮極には資本主義の消滅を望み、それを全面的に変革した新しい社会制度を提案するものであった。そこでこれを提出された委員会は、この計画について賛否の決定をせず、公共の討議に委ねることを勧告しただけで州総会に回してしまった。このように州当局によって無視されたが、近代社会主義の歴史にとっては無視どころではない。これこそオウエンの思想の最も成熟した展開であり、彼の行動の新しい出発点をなすばかりでなく、資本主義の根本批判から、社会主義、共産主義の主張に向かったものとして、画期的な意義を有するのである。(1)

「新社会観」から「ラナーク州への報告」というオウエンの思想の推移は、単に資本家から社会主義者へ、またはブルジョア・イデオロギーからプロレタリア・イデオロギーへという変化とみなすべきでなく、後者を前者の発展としてとらえるべきであることを、すでに述べた。そしてブルジョア的な立場の露骨な「新社会観」の中に、過渡的恐慌以後に協同社会主義として開花すべき萌芽が存在することも、すでに明らかにしたところである。それではオウエンの思想の成熟を示す(2)「ラナーク州への報告」はどのような性格をもっているのか？、以下にこれをみよう。

「ラナーク州への報告」の基本構想は、その文脈に従えば、次のようになる。

目的	現状	原因	改善手段
労働諸階級の性格改善	無知・悲惨	生産力増大、制度の不備	教育・国家の介入
費用節減、市場創出	生産過剰	自由競争、商業原理、分業	自然的価値標準の採用
雇用を与え困窮救済	失業	人為的価値標準	鍬耕作
			協同社会の建設

1　現在の困窮の原因について

生産力の急速な増大（機械の採用）→生産過剰・失業→困窮

これは制度の欠陥による。

「本報告者は、労働諸階級のための有益な仕事の欠乏、およびその結果としての公共の困窮は、新しい生産力の急速な増大によるものであり、社会がそれの有益な使用のために適切な諸制度をつくることを怠ったからであると、結論したい気持をもった。(3)」

ロバート・オウエンとウィリアム・ゴドウィン（下）

2　制度の欠陥について

諸制度の欠陥＝新資本増加分の配分様式の欠陥＝交換手段の不足＝人為的価値標準

この欠陥は、貨幣の問題としてとらえられる。

「労働諸階級にとっての仕事の不足は、富の不足、あるいは現在存在するそれを大いに増大させる諸手段の不足から発生するはずはなく、新資本のこの異常な増加分を社会全体に配分する様式におけるある欠陥から、あるいは商業的にいえば、生産諸手段と同じ広さの交換諸手段の不足から、生ずるものである。(4)」

3　価値標準の変革について

そこで、「すべての害悪の根源である」貨幣を廃し、自然的価値標準を採用することが提案される。

交換の歴史は次のようになる。

現物交換（労働量による交換）→商業（すべての財貨を最低の労働量で生産または獲得、それと交換に最大の労働量を獲得）・人為的価値標準（金属）→自然的価値標準

人為的価値標準……発明を刺激、人間の性格に勤勉と能力を与えたが、人間を愚かな個人的利己主義者とし、仲間に対抗させ、詐欺や欺瞞を呼び起し、盲目的生産へとかりたて、知恵を奪う。低賃金と市場の弱体化。

自然的価値標準……人間労働、肉体的精神的人間能力。これによって、人間労働はその自然的内在的価値を獲得、需要を確定し、労働者が残忍な人為的賃金制度の奴隷とされなくなる。有益な国内市場を開発。他国民との有利な交易手段を保障。現存の有害な商業的規制を除去。現在の腐敗した個人契約制度を不必要にする。労働諸階級に教育の時間を与え、貧窮と無知をなくす。人間性を改善し、抑圧をなくす。

4　鍬（スペイド）耕作について

ついで、消費が生産と歩調を合わせるようにするために、犁（プラウ）にかえて鍬（スペイド）で耕すことが勧告される。その理由は、

鍬による耕作は、土壌をよく砕き、深く掘り起し、適度に水分を供給するのに対して、犁は土をほぐさないで固め、単なる表面的な道具である。

犁は、二頭の馬と一人の人間によって多くの仕事をし、エーカー当りの耕作費は安いけれども、鍬による耕作は作物の価値を増し、増大した耕作費を帳消しにしてあまりある。

鍬耕作をするためには、予備的変革として人間の性質についての知識を体得しなければならない。その時農業は、分業の弊害を脱して楽しい仕事となる。

犁耕作――雇用不足、人口過剰。

鍬耕作――恒久かつ有益な雇用。

5　新しい組織について

工業を付属した農村。

平行四辺形、共同生活。

肉体労働と精神労働の結合。

私的利益と公共の利益の完全な一致。

教育。

（1）　拙著「オウエン」、一九六五年、九〇―九一ページ。

（2）　「一八一二年から二一年にかけて、オウエンは、その精神的能力の絶頂にあった。それ以後の四〇年間、すなわち一八二一年より一八五八年の彼の死に至るまでの、彼の活動は、彼の見解の反覆と宣伝とであるか――それに、彼はすでに一九世紀の二〇年代に到達していた――もしくは、その見解を実施せんとする試みであった」。M. Beer, *A History of British Socialism*, 1919, p.180. 加田哲二訳(一)

二一五ページ。

「『新社会観』は一八一三年に、『ラナーク州への報告』は一八二一年に現われた。この八年の間に、ロバート・オウエンは人類の知識に対して本質的な貢献をなした。」G. D. H. Cole, *Introduction to A New View of Society and Other Writings by R. Owen*, in *Everyman's Library*, 1927, p. vii.

「『ラナーク州への報告』は、オウエンの社会学説の群を抜いて最良のまた最も包括的な解説である。その中で、彼は初めて十分に彼の心を語り、また彼の計画を、失業救済のための単なる方策としてではなくて、取って代るべき社会秩序の基礎として詳述している。それは、形の上ではラナーク州の上区によって任命された委員会への報告書であり、その委員会は疑いもなく単に窮乏救済の方法を期待していたのである。しかしオウエンは、彼の新らしい社会的福音を明快に宣言することによって、彼の信条の範囲をはるかに越えた。オウエン主義運動が社会主義および協同主義の運動として成長したのは、実にこの報告書の中で初めて明快に述べられた学説においてである。その過渡的性格を示す章句がこの報告書の中にあるが、しかし本質的にはそれは改革者オウエンから社会主義先駆者オウエンへの変化を示している。」G. D. H. Cole, *Robert Owen*, 1925, p. 168.

(3) R. Owen, *Report to the County of Lanark, of a plan for relieving public distress, and removing discontent, by giving permanent, productive employment, to the poor and working classes; under arrangements which will essentially improve their character, and ameliorate their condition; diminish the expenses of production and consumption, and create markets co-extensive with production*, 1821, p. 3. 永井・鈴木訳は *A New View of Society and Other Writings by Robert Owen, Everyman's Library*, 1949. によっているので、一八二一年版の原著から訳した私の引用訳文とはいく分異る。

(4) *Ibid.*, p. 4. 邦訳六九ページ。

(2) ブルジョア的性格

以上のような構想をもつ「ラナーク州への報告」には、一面「新社会観」の延長としてのブルジョア的性格がある。このことは先ず、この書の副題を見ても明らかであろう。すなわちこの計画の目的は、次の三つである。

1　貧しい労働諸階級の性格改善、彼らの状態の改良。

2　生産と消費の諸費用節減、生産と同じ広さの市場創出。

3　貧しい労働諸階級に恒久的、生産的仕事を与え、公共の困窮を救済し、不満を除去する。

もちろんこの三つは、ラナーク州上区の有力者（ジェントルマン）委員会の求めに答えたという執筆の事情にもよるが、オウエンはこの目的に何ら疑問を抱くことなく、資本のための優秀労働力の育成、資本のための合理化、市場拡大、資本のための雇用拡大、資本のための労働者の不満除去を求めたのである。(1)

次に彼は、産業革命期における労働者階級の絶対的窮乏化という事実を直視し、生産と消費の不調和を見、その原因を生産力と諸制度の矛盾と見た点において鋭いものがあるけれども、資本主義の分析、批判の方法においては、ブルジョア的俗流経済学の限界の中にとどまっている。すなわち、恐慌を過少消費説的観点からとらえて、有効需要不足＝貨幣の不足と考える皮相な見解を示した。そこでは問題の根源を資本の本質において見るのではなく、貨幣と資本とを混同して、資本ではなく貨幣（人為的価値標準・金銀）を否定し、矛盾の根源を貨幣に極限すると共に、生産過程の問題を流通過程一般に拡大して、貨幣の技術的変革によって問題を解決しうると考えたのである。

こうして彼は、労働と資本の間の交換については、「労働諸階級が、野蛮あるいは文明のいずれかの社会によって、かつて実施されたいかなる奴隷制よりも、その結果においてはるかに残忍な賃金という人為的制度の奴隷とされる」(2)と述べながら、労資の敵対関係の認識がなかった。従って価値の内在的尺度と外在的尺度を混同した自然的価値標準による高賃金の主張は、労資間の実質的な等価交換や、全労働収益権を主張するものではなく、利潤を攻撃するものではなく、「人間労働はかくてその自然的あるいは内在的価値を獲得するであろうし、その価値は科学が進歩するにつれて増大するであろう」(3)というように、労働者を困窮から救い「公正な」賃金を与えようとするものに過ぎない。この点でも、利潤を攻撃したプロレタリアートやリカードゥ派社会主義者とは異って、ミルやマカロックらの俗流経済学に近い。

そして、彼は労働者の必要生産費を越える富の生産を社会の利益と考えているので、この利益はまさに利潤としてとらえられ、生産的消費および利潤を忘れて、市場は賃金によって構成されるという見解から、高賃金＝市場拡大＝高利潤が賞揚される。これを妨げるものが、少数者の富の蓄積であるから、自然的価値標準によって、かかる独占を排して、有利な交換により労資共に繁栄するという矛盾の解消された産業資本主義の姿が、彼の提案の一つの骨格を形成している。

かくして、彼にあっては私有財産、商品生産に対する批判が徹底せず、資本家階級、国家に対する本質的批判が存在せず、共産主義を資本家の営利心に訴え、労働者階級の救済、協同社会の建設と指導をおのずから彼らに期待してしまった。

以上のように、オウエンは決してプロレタリアートのイデオローグではなく、またプロレタリアートのためにブルジョアジーと闘ったリカードゥ派社会主義とも異っていた。[4] プロレタリアートのために多くの実践活動をしたとしても、他の空想的社会主義者たちと同じく、彼の一面はブルジョア的であり、その資本主義認識、その批判、理想社会の提案においては、資本家的、企業経営者的感覚が強く感ぜられる。このような立場から理想化された純粋な資本主義のイデアルティプスが、彼の提案する共産主義社会にも強く投影されているのである。

（1） たとえば次のような言葉に、商業的な利益を追求するブルジョア性が現われている。

「価値規準におけるこの変革は、すべてのものの欲求が十分に充足されるにいたるまで、最も有益な国内市場をただちに開発するであろう」。R. Owen, *op. cit.*, p. 7. 訳七二ページ。

「そして労働諸階級は、これまでの世界のいかなる時代にもまして、彼ら自身と社会とにとってはるかに多くの商業的価値あるものにされるであろう」。*Ibid.*, p. 7. 訳七三ページ。

「ただ一つ、労働諸階級の上首尾な、さもなければ有益な勤労をはばむのは、実に利益のあがる市場の欠如である。」*Ibid.*, p. 9. 訳七四ページ。

「生産の利潤は、あらゆる場合に、生産された財貨に含まれる労働の価値から生ずるであろうし、またこの利潤が最も大きいことが、社会の利益になるであろう」。*Ibid.*, p. 21. 訳八三ページ。

「土地所有者および資本家は、労働者と同じ程度にこの制度によって恩恵をこうむるであろう。なぜなら、労働はすべての価値の基礎であり、また、高い利潤が農業および工業の生産物に対して支払われうるのは、ただ、気前よく報酬を与えられる労働からのみだからである。」*Ibid.*, p. 21. 訳八四ページ。

「この方策（価値規準の変更）によって、現在富の生産者に利潤を提供することに対して事実上閉鎖されている世界の全市場は、限りなく開放されるであろうし、またそれぞれの個人的交換においても、全利害関係者が、彼らの労働に対して必ず十分な報酬を受けとるであろう。」*Ibid.*, p. 21–2. 訳八四ページ。

「これらの新しい農業および一般の仕事の施設は、一人ないし任意の人数の土地所有者あるいは大資本家によって、慈善的および公共的目的に投ずる巨額の基金を持つ確かな会社によって、被救済民や救貧税からまぬがれようとする教区および州によって、そして現在の体制の害悪からまぬがれようとする農民や機械工や小売商人（トレイズマン）という中産階級および労働諸階級の組織によって、つくられるであろう。」*Ibid.*, p. 46. 訳一〇四ページ。

「土地、資本および労働は、提案された諸制度のもとでは、現在公衆に知られている他のいかなるもののもとで用いられるよりも、はるかに大きい金銭的利益を生むであろうから、……すべての人が、すぐにそれら諸制度を実行に移すことに結束するであろう。」*Ibid.*, p. 46. 訳一〇四ページ。

「本報告者の実際的な仕事は、今雇用不足のために祖国にとって負担である人びとともに、始まるであろう。本報告者は、これらの人びとが、彼ら自身と家族とを扶養し、また彼らの労働を活動させるのに必要な資本の利子を支払うことができるように、するであろう。」*Ibid.*, p. 59. 訳一一五ページ。

（2） （3） *Ibid.*, p. 7. 訳七二ページ。

（4） この点について、フォクスウェルは次のように云う。「オウエンは決して権利の要求を掲げなかった。だが近代の革命的社会主義はこのような要求にもとづいている。……現存する財産を攻撃することは、彼には必要のない愚策であった。根底においては、彼の思想は非常にブルジョア型であった。」H. S. Foxwell, *Introduction to The Right to the Whole Produce of Labour, the origin and development of the theory of labour's claim to the whole product of industry*, by Dr. Anton Menger, translated by M. E. Tanner, 1899, pp. lxxxiv-lxxxv.

(3) ゴドウィン的性格

a. ゴドウィンのユートウピア

以上のようなブルジョア的性格にもかかわらず、オウエンの思想をもって単にブルジョアジーのイデオローグと割り切ることはできない。すでに述べたように、ブルジョア的性格の強い「新社会観」においてもすでに協同社会主義へと発展する芽を含んでいたし、その後「平等の労働義務と生産物に対する平等な請求権をともなう、きわめて明確な共産主義」[1]に到達したのである。その性格を明らかにするために、以下ゴドウィンの思想と比較検討してみよう。

「政治的正義」におけるゴドウィンのユートウピアは、一言にすれば、政府のない単純な社会、平等財産の制度ということであって、その特徴を次のようにまとめることができる。

1 必要にもとづく財産。財産はそれを最も必要とする人が所有すべきであるということで、従って必要に差があれば完全な平等分配ではないけれども、人間性は誰も似たようなものなので、絶えず平等化すると考えられている。

2 利己心の消滅。人は理性の発達に従って常に全体の利益のために行動し、従って全体の需要に適応した勤労に慣れる。そこで富の蓄積、商品、交換、貨幣などは存在しない。

3 全員の労働、労働時間の短縮。全員が労働し、役人や軍人などの徒食階級は消滅し、贅沢品がなくなるので、各人は一日三〇分の労働で必要を満たすに十分となる。従って労働は苦痛ではなく一種の気晴らし、楽しみとなる。余暇は理性の発達に向けられ、すべての人が知識人となるから、肉体労働と精神労働は結合し、分業は存在しない。分業批判。

4 人間性の変革。理性が発展するため、人びとは高度の快楽を求め、怠惰、犯罪がなくなることはもちろん、贅沢、虚飾、従属心がなくなり、公平、誠実および卓越への愛（love of distinction）が行動の基準となる。

5 個人判断（private judgement）の強調。そこでは自己の主体性にもとづく判断が重視され、画一性が排される。個人の理性に対して、監督、制限、抑圧はない。一切の政府は存在しない。

6 協同の排除。個人判断が重視されるため、これを損う協同が排除される。協同の作業、食事、倉庫などはない。協業は機械の発達によって克服されると考えられる。結婚して同居することも、心の独立した進歩を妨げるから悪である。

7 無限の進歩観。知識の進歩には限界がないから、人間は無限に完全へと近づく。理想社会が人口の圧力によって崩壊するという考えに対しては、地表の四分の三は未耕作であり、既耕地も無限に改善を加えられるから、今後、幾万世紀も人口増加は可能であると考えられる。そしていつか人間は物質に対して全能となり、自分の肉体も統御しうるから、老衰、睡眠を追放し、生殖を停止し、ついには死を免かれる。

つぎに、ゴドウィンの資本主義批判は、権力機構たる政府の批判、その根底にある私有財産、その蓄積、掠奪、詐欺、犯罪性、暴力性、知識進歩の阻害、労働強化、人間疎外などにあることはすでに述べた。それではこの蓄積財産の制度を克服して、どのようにして平等財産の制度に移行するか。その過程は二つの面から考察される。

政治過程――先ず政治権力の集中を排し、できる限り権力の及ぶ範囲を狭くし、その力を弱める。（その大きさとして、教区parish程度のものが想定されている。）緊急の際にはこれら小地域が連合して国民議会を形成するが、やがてこれも不要となり、地域の犯罪などを裁くには非職業的な陪審員制度（jury）で足りるようになる。犯罪者に対する命令はやがて勧告となり、各人の理性の発達につれて、やがて陪審制度自体も消滅し、一切の統治は終ることとなる。

経済過程――理性の発達により、自由平等はすべての人にとって福音であることが明らかとなる。そこで、富者はやがて譲歩し、雇主は労働者に対し寛大となって、より多くの賃金を支払い、少ない蓄積で満足するようになる。こうして人びとは、投機や商業上の繁栄や利得の配慮を軽蔑をもって眺めるようになり、一切の蓄積動機は消滅して、平等な財産制度に移

行する。

（1）F. Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*, in *Marx Engels Werke*, Band 20, 1962, S. 247. 粟田訳、岩波文庫下巻一九四ページ。

b. オウエンのユートウピアとの共通性

さて、それではこのような資本主義批判、ユートウピアの特徴、それへの移行過程を、オウエンの思想と比べるとどのようになるだろうか。

資本主義批判については、オウエンは、教育、失業、法律、宗教、利己心、盲目的利潤追求、商業原理に対する批判（「新社会観」）から、蓄積による労働者の窮乏化の認識（「工場制度の影響に関する考察」）、そして社会制度、貨幣、分業、私有財産の否定（「ラナーク州への報告」）へと進んだ。ゴドウィンの資本主義批判は、単なる環境批判ではなく、その背後にある国家権力およびそれを支える私有財産制度の否定に達していたので、オウエンのそれよりも鋭い。オウエンは遂に現存する権力機構と私有財産の否定にまで完全には達しなかったけれども、ゴドウィンから、利己心、自由競争、奢侈、蓄積、分業、私有財産に対する批判などを学んだことであろう。

そこで、両者のユートウピアを比較してみると、オウエンが明らかにゴドウィンから得たもの、もしくは類似性の強いものとして、前節に示したゴドウィンのユートウピアにおける次の特徴が考えられる。

2　利己心の消滅。

「新社会観」ですでに強調されていた利己心の否定は、「ラナーク州への報告」においてももちろん継承され、協同社会においては、「指導原理は公共の利益または全住民の一般的利益である」[1]と規定されている。「永久に公共の利益に対立したこの個人的利益の原理は、もっとも著名な政治経済学者たちによって、社会体制の礎石であり、それなしには社会が存立しえないものだと考えられている。」[2]「この個人的利益の原理から、怒りと悪意を生み出す人類のあらゆる分裂と、階級、宗派、党派および国民的敵意という際限もないあやまちやわざわい、また、人類をこれまで苦しめてきたすべての犯罪と不幸とが、生じたのである。」[3]「これらの経済学者が依拠して進む原理こそが、諸国民、あるいは個々人の富を増大させるものではなく、それ自身貧困の唯一の原因なのである。」[4]「個人的な対立する利害関係の体制は、今や誤謬と矛盾の極点に達した。」[5]そこで富の蓄積、貨幣は否定されるのだが、前述のブルジョア的性格からして、ゴドウィンとは違って商品交換は認められ、労資双方の商業的利益が強調されている点は、矛盾している。

3　全員の労働と労働時間の短縮、分業の否定。

労働時間の短縮と余暇の増大、余暇における教育による性格改善こそはオウエンの強い信条で、彼はそれを自分の工場で実行し、また工場法制定運動に提身した。彼のユートウピアでは、次のようになる。「労働諸階級のためにうまく工夫された施設のもとでは、彼らはすべて、ごく短い時間に、そして大層容易に、また楽しく、生活の必需品や慰安品を自分自身で獲得するであろうから、その仕事は、生活の合理的な楽しみにとって最上の健康と精神とを彼らに保たせるに十分なレクリエイションにすぎないことが体験されるであろう。」[6]ただしここでは、「上層諸階級すなわち肉体労働をしないで生活する人びとや、その器用な手仕事がいかなるときにも農業や園芸に雇用されるのを許さない人びと」[7]が存在し、権力機構を否定しなかったオウエンの限界を示している。器用な手仕事については、やがて機械によって置き換えられることを期待しているが。

だが一般には、彼は分業を批判する。「現在の体制の下では、労働諸階級の個々人の間に、精神的力と肉体労働との極めて細かな分割がある。……今述べんとしている詳細は、それとは反対の実践、すなわち、労働諸階級の個々人における広範な精神的および肉体的諸力の結合、私的利益と公共の利益との完全な一致……等々……に、導くと思われる諸原理にもとづ

いて、考え出されたものである。[8]」そこで、「すべての人びとは、科学が提供することのできるあらゆる改良の助力を受けるこの部門（工業――白井注）の、ある一つあるいはそれ以上の仕事に、農耕や園芸に従事することと交互に、順番にあたるであろう。細かな分業と利害の分割とを勧告するのが、これまでの一般の意見であった。しかしながら、この細かな分業と利害の分割とは、貧困、無知、あらゆる種類の浪費、社会全体に拡がる広範な敵対、犯罪、不幸、および極度の肉体的および精神的低能、の別の言葉に過ぎないことが、ほどなく明らかになるであろう。[9]」オウエンは、社会的分業の現実的な必要とその弊害の克服という課題を、農工業間のロウティションによって解決しようというすぐれた着想を示した。そして職業分業と作業分業の双方を否定し、「不健康なピン先職工――釘頭職工――糸継工――理解力や合理的思考力もなくぼんやりと土地や自分のまわりを見つめている百姓（clodhopper）に代って、そこには、最下位の人間をさえ、過去および現在の社会環境によってこれまで形成されてきたどの階級の最上の人間よりも数段上に置くような、慣習、知識、作法、性向を持ち、行動力と有益な知識に満ちた労働諸階級が誕生してくる[10]」ことを期待したのである。[11] この点は、単に分業を批判したゴドウィンよりも進んでいる。

4　人間性の変革。

こうしてオウエンも、将来人間の性質が環境の変化と共に大きく変化すると楽観する。ゴドウィンと同じく、オウエンは素朴を愛し、提案された協同社会内部の諸設備は非常に簡単なもので、教育によって子供は合理的存在となり、「この知識とそれから生ずる感情とをもってすれば、新しい富の創出に対する現存の多数の障害物もまた、今社会のあらゆる階層に広がっている無数の欺瞞の動機とともに、なくなるであろう。公正と正義、率直と公平の原理が、これらの社会の全行為に感化を及ぼすであろう。[12]」と説かれている。公正、正義、率直、公平の原理というスローガンは、ほとんどゴドウィンの言葉そのままである。

7　無限の進歩観。

啓蒙思想の特徴たる進歩の思想はむろんオウエンの中に見られるが、その極端な形態たる完全可能説（perfectibility）をも彼はゴドウィンから引き継いだ。「新社会観」においてオウエンはすでにマルサスの人口論を批判し、その論拠として、人間の食糧生産力、化学の発達に限界はないことなどを挙げ、向う数十年間の人類の自然増殖を楽観しており、[13] さらに「ラナーク州への報告」においては、その冒頭において、

「三、正しく適用された肉体労働は、世界のあらゆるところで、考えられうるどれほどの人口増加のもとでも、将来何世紀間も、この価値を持ち続けるようになろう。

四、肉体労働の正しい適用の下では、大ブリテンおよびその属領は、はかりしれない人口増加を、その全住民にとって最も有益に、維持するようになろう。

五、肉体労働がそのように適用される時には、人口が、その増加によって社会が利益を受けるのと同じ程度の速さで前進するように、長年にわたって刺激されることはありえないことが、わかるだろう[14]」。

と述べている。これはゴドウィンほど極端な議論を展開してはいないが、ゴドウィンの主張（食糧の飛躍的増産、人口の道徳的抑制、社会の無限の改善と進歩）を受けつぎ、マルサスの人口論に対立したものであって、事実マルサスは、その「人口の原理」初版においては一九章中六章を当ててゴドウィンを批判したのに、五、六版では一章を残すにとどまり、代ってオウエンがその攻撃の対象に選ばれたのである。[15]

（1）R. Owen, *Report to the County of Lanark*, 1821, p. 17. 訳八〇ページ。
（2）*Ibid.*, p. 28. 訳八九ページ。
（3）*Ibid.*, p. 29. 訳八九ページ。

（4）*Ibid.*, p. 29. 訳八九ページ。
（5）*Ibid.*, p. 30. 訳九〇ページ。
（6）*Ibid.*, p. 26. 訳八六ページ。
（7）*Ibid.*, p. 26. 訳八七ページ。
（8）*Ibid.*, pp. 34-5. 訳九四ページ。
（9）*Ibid.*, pp. 44-5. 訳一〇二―三ページ。
（10）*Ibid.*, pp. 45. 訳一〇三―四ページ。
（11）この点について、エンゲルスは次のような讃辞を与えている。「空想的社会主義者たちは分業の結果について、すなわち一方では労働者の衰弱、他方では同一の行為を終身単調に機械的に繰り返すことしかしない労働活動そのものの衰弱について、すでにはっきりと理解していた。都市と農村との対立をなくすことは、フリエもオウエンも、旧来の分業一般をなくすための第一の根本条件として要求していることである。この二人のどちらの場合でも、住民は一六〇〇人ないし三〇〇〇人ずつの集団として国中に配置されることになっており、各集団はそれぞれの区域の中心にある巨大な殿堂に住み、共同の家計を営むのである。フリエは確かにそこここで都市ということを口にしてはいるが、しかしこの都市そのものは、これまた、そのような殿堂の四つか五つがかなり近接して存在するものからできているのである。二人のどちらの場合でも、社会の各成員は農業にも工業にも参加する。フリエの場合、工業で主要な役割を演ずるのは手工業とマニュファクチュアであるが、これに対してオウエンの場合には、それはすでに大工業であり、彼は家事労働に蒸気力と機械を導入することをいちはやく要求している。しかし、二人とも農業および工業の内部においてさえ、各人の仕事をできるかぎりさまざまに転換させることを要求しており、またそれに応じてできるかぎり全面的な技術的活動ができるような、青年の教育を要求している。二人のどちらの場合にも人間は全面的な実践活動を通じて全面的な発達をとげることになっているし、また労働は分業のために失われたその魅力を、まず右のような転換と、それに応じてそれぞれの労働にあてられる――フリエの言葉でいえば――『着席時間』が短縮されることによって、回復することになっている。この二人の方が、デューリング氏の受けついでいる搾取階級の考え方、すなわち都市と農村との対立は事柄の性質上不可避的なものであると考え、ある数の『存在』はどんな事情のもとでも一つの物品を生産する運命におとしいれられなければならないかのような偏見にとらわれ、生活様式によって区別される人間の『さまざまな経済上の変種』、つまりほかならぬまさにこの物の実行に喜びを感じ、そのため自分自身の隷属化や一面化を喜ぶほどまでに落ちこんでしまった人びとを永久化しようとする考え方よりも、はるかにまさっている。」F. Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*, in *Werke*, Band 20, SS. 272-3. 粟田訳（下）二三八―二四〇ページ。
（12）R. Owen, *op. cit.*, p. 50. 訳一〇七―八ページ。
（13）R. Owen, *A New View of Society: Essays on the Formation of Character*, in *Everyman's Library*, 1927, pp. 85-6. 楊井克巳訳一三九ページ。
（14）R. Owen, *Report to the County of Lanark*, 1821, pp. 1-2. 訳六七―八ページ。
（15）一八一七年に書かれた「人口の原理」第五版第三篇第三章において、マルサスは「余が衷心から尊敬する紳士、ラナークのオウエン氏は、最近『新社会観』と題する一著述を公刊したが、その目的は、労働と財との共有を含むある制度の実現のために、あらかじめ人心を準備せしめんとするにある」（T. R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 1926, vol. II, p. 40. 寺尾琢磨訳四五二ページ）といっている。平等制度を排するマルサスの嗅覚は、「新社会観」と「ラナーク州への報告」の密接な関連をすでに見ていたというべきだろう。

c. 両者の相違と影響関係

次に、両者の相違と見られる項目としては、左のものがある。

1　必要にもとづく財産。

交換および分配については、「ラナーク州への報告」の「第五――剰余生産物の処理といくつかの組織の間に存在する結合関係」において、次のように説明されている。

従来の社会――生活資料確保のため、一般的利己心を生む。
提案された体制――遙かに多くの富が生産され、利己心の動機欠如、個人的蓄積欲消滅。労働量に応じた公正な交換↓
必要に応じた消費。各組織の剰余生産物の、労働量に応じた交換。剰余生産物の管理、交換、分配のための、制度と人間がつくられる。[1]

従ってオウエンの場合には、ゴドウィンとは違って自由財を中心とした共産主義であり、過渡的形態としての、商品生産、

交換、労働の価値を表示する紙券（ペイパー）[2]が、強固に存在する。ただしゴドウィンの場合にも、「政治的正義」三版においては、消極的・補助的な意味ながらも、自己の勤勉の産物に対する権利を認めたので、必要にもとづく財産という共産主義への移行には段階が設けられ、オウエンの公正な労働量に応じた商品交換の段階と類似性が見出されよう。

5　個人判断の強調。

オウエンは既述のように、「ニュー・ラナーク住民への講演」において、私的判断の権利を強調するに至ったが、ゴドウィンのような権力批判はなく、提案された組織は、単一の全体的調理制度、衣服など、かなり画一的なものである。そして「土地所有者と資本家、公共団体、教区あるいは州によって建設されるものは、これらの有力者がそれらを監督するように任命する人たちの指導下にあり、当然それらの建設者によって定められる規則や規定に支配されるだろう」[3]。と考えられている。

6　協同の排除。

右と関連して、ゴドウィンとオウエンの最も顕著な差を見せるのが、前者の無政府主義と後者の協同社会主義である。前者は一切の協同を排したのに対し、後者は協同をもって新しい社会の基本原理とした。

しかしながら右のような表面的には著しい差にもかかわらず、両者には実質的な共通性が存在することを見逃すべきではない。すなわち、第一に、ゴドウィンの政治的正義を規定する全体の利益という観念は、相互協力扶助以外の何ものでもなく、ただ彼はこれをあくまでも個人の判断の下に行おうとしたにすぎない。これに対してオウエンは、協同の経済効果を重視したので、従って両者は、その基本的精神において共通している[4]。第二に、オウエンにはゴドウィンにおけるような権力批判は存在しないが、彼はゴドウィンと同じく、議会改革や革命などの政治的手段に対する批判者であり、彼の提案した協同村は、権力消滅のための過渡的段階としてゴドウィンが提案した過渡期としての小社会と同じく、事実上政治的経済的権力はその村に極限された単純な社会であった[5]。すなわち、

「諸原理が理解されていれば、かなりふつうの能力のある人は、このような諸施設を、今最も大きい商事会社あるいは工業会社が運営されているのよりももっとたやすく監督するだろう[6]。」

「中産階級および労働諸階級によって、完全な互恵関係にもとづいて形成されるものは、分裂、利害の対立、反目、あるいは権力争いがきっと生み出す俗悪野卑な情念のいかなるものをも将来予防する諸原理にもとづいて、彼ら自身によって統治されるべきである。それらの諸業務は、一定年令間の組織の全成員――たとえば三五歳と四五歳との間の、あるいは四〇歳と五〇歳との間の人びとから成る委員会によって運営をされるべきである。おそらく前者は、後者よりも、若さの活動力と年令の経験とをより多く結合するであろうが、いずれの年令期間に定められるかは、あまり重要ではない。しばらくすれば、これらの組織が将来それらのすべての仕事を進めていく上でのたやすさは、統治の業務を単なる娯楽にするほどであろう。そして、統治する当事者は数年のうちにまた被治者になるのであるから、彼らは常に、彼らが、将来みずからの施政措置の善悪いずれかの結果をなめることになるのを承知していなければならない。この公正かつ自然な制度によって、選挙と選挙運動との無数の害悪はすべて避けられるであろう。……

これらの組織が将来すみやかに入手するすぐれた諸利益と、それらがすみやかに獲得するさらに一層すぐれた知識とは、いま名誉や特権と呼ばれているものに対するほんの僅かの慾求をも、それらの組織の方で排除するであろう[7]。」

この提案の内容は極めて重大であって、ここには、一　権力の縮小、二　直接民主主義、代議政批判、三　政治の非職業化、交替統治、統治者と被統治者の対立の解消、四　庶民に対する信頼、という思想が明確に現われている。これはアナキズムではないけれども、ゴドウィンの代議政批判、過渡的小社会の考えに近く、事実上国家の消滅を意味した。

さて、以上の点を考慮に入れると、オウエンが独自に考案した価値標準の変革、鍬耕作などを含めて、両者の本質的な差

として最後まで残るものは、次の点であろう。

1、ユートウピアの実現を資本家の金銭的利益に訴え、資本家によるその経営をも期待したこと。

2、ユートウピアにおける資本主義の投影。すなわち商品生産、交換、賃金、利潤などの根強い残存。

3、国家権力に対する批判の欠如、国家の介入の期待。

これは結局オウエンのブルジョア的性格に帰するもので、机上の知識人ゴドウィンと、産業革命の先端を進んだ資本家オウエンの環境の差は、いかんともしがたかったといわねばならない。しかしながらこの点を除くと、オウエンのユートウピアは、リカードウ、[8] ルソー、ペスタロッチ、ベラーズ[9]などの影響も見られるとしても、ゴドウィンに最も近いと考えることができる。おそらく、オウエンにとって、ゴドウィン的な自由平等共産の社会、人びとの理性が悲惨な環境に妨げられることなく無限に進歩する社会が、窮極のヴィジョンであり理想であった。だがあくまで実際家の彼にとって、その実現を人びとの理性の自然的発展にゆだねることはできなかった。現実はむしろ窮乏化が激しく、人びとの理性の発展どころではなかったからである。そこでこの大目的の手段として、これを資本家の感覚から一つの企業として地上に設計して見せたのが、ほかならぬ彼の協同村ではないだろうか。[10] その意味でこれは、まさに「商人的打算の結果」[11]であると同時に、資本を認めるフリエのファランジュなどよりも遙かに徹底した一つの「完全な共産主義」という、楯の両面をもっていた。鍬耕作など他の若干の要素はあるとしても、基本的にはこの社会は、ゴドウィンのユートウピアに純粋な資本主義の像が投影され、オウエンの経験がオーヴァーラップして構想されたものと見ることができる。オウエンが大資本家でありながら、農業を中心としたむしろ質朴な協同村を描いたこと、その実現のために、「直接労働者階級に向かい」[12]ながら、アメリカからの帰国後六年にして労働運動から離れたこと、そしてブルジョア経済学[13]とチャーチズム運動の双方から攻撃を受け、その支持者を多く小ブルジョアの中に見出したことも、こうして理解することができよう。

（終）

（1）R. Owen, *op. cit.*, pp. 50-51. 訳一〇八ページ。

（2）「オウエンでは、労働証票は社会の資源の完全な共有と自由な利用へ進む一つの過渡的形態にすぎず、かつまた、せいぜいのところ、イギリスの公衆に共産主義をなっとくさせるための一つの手段なのである。従って、何かの乱用のためにオウエンの社会がやむなく労働証票を廃止しなければならなくなったとしても、この社会はその目標に向ってさらに一歩進んで、もっと完全な発展段階に踏みこむことになる。」F. Engels, a. a. O., S. 285. 訳(下)二二五八ページ。ただし、この過渡的形態はゴドウィンに比べると遙かに長い。

（3）R. Owen, *op. cit.*, p. 48. 訳一〇六ページ。

（4）「オウエンのゴドウィンとの唯一の主な差は、彼が協同を強調したことの中にある。ゴドウィンは、個人の保全のための極端な配慮から、人生の最も必要な局面におけるもの以外には、常に人びとの間の協同を嫌う傾向をもっていた。だが、ある意味では、彼はわれわれの行動はなかんずく全体の利益の配慮によって指示されねばならぬと主張したのだから、協同はゴドウィンの教説の欠くべからざる部分であった。この意味において、ゴドウィンの教説には外見上のパラドックスがあるが、これは容易に解決される。人間の間の相互扶助は政治的正義の必然的な部分であるが、協同においては、人びととのわれわれの接触が、一般的利益や正義と真理の自然法についてのわれわれのヴィジョンを曇らせないかということに注意せねばならぬ。」G. Woodcock, *William Godwin, A biographical study*, 1946, p. 250.

（5）「オウエンは、彼のゴドウィン的思想を協同組合と労働組合の中に持ちこみ、これらの運動に、政治活動を嫌い、彼ら自身の組織形態に依存する今日まで続いている傾向を残した。だが社会についての彼の特徴的なヴィジョン、協同村の組織は、事実、正確な言葉において自治教区の分権社会というゴドウィンの概念を述べる試みであった。」*Ibid.*, pp. 250—251.

（6）R. Owen, *op. cit.*, p. 47. 訳一〇五ページ。

（7）*Ibid.*, p. 48. 訳一〇六ページ。オウエンは一八一五年以後工場法制定運動に尽力し、一八一九年には、すべての階級、特に失業した無教育な階級のために公の対策を促進すべく下院に立候補したが、有権者は反対派に買収されて落選してしまった。この年以後は政治に興味を失い、ブルジョアジーのための選挙法改正運動などには全く無関心で、政治的な急進主義者、民主主義者とは袂を別った。また彼は労働者を上から解放しようとしたために、これまで民主主義者として評価されたことはない。たとえばベアは、「彼は決して民主主義者ではなかった。彼は常に労働者と共にいたけれども、彼らの仲間になり切ったのではなかった。彼こそ、自己を犠牲にした、労働者の父であり教師であり、権威ある忠告者であり、指導者であった。しかし、決して平等者間の主長ではなかった。彼は、完全にすべての民衆の煽動ということをやらなかった。」(M. Beer, *op. cit.*, p. 162. 訳一九四ページ)と述べている。確かに、オウエンは

表面的には政治制度の民主的変革を主張したこともなければ、完全な平等主義者でもない。だが、ここに引用した章句は、彼を民主主義思想史の上に高く位置づけるであろう。

（8）「オウエンの全共産主義は、経済学的、論戦的に登場するかぎりでは、リカードゥに立脚する」（Engels, *Vorwort zu Das Kapital*, Bd. II, S. 14. 長谷部訳二三ページ）というエンゲルスの言葉は、オウエンがリカードゥ経済学の段階に立ち、労働価値説から出発したという意味においてのみしかいえない。オウエンの価値の概念は混濁しているし、利潤と賃金、地代の対抗関係の認識も存在しない。マルクスは、オウエンを、経済学者の前提そのものから出発した反対論（社会主義）と区別している。K. Marx, *Theorien über den Mehrwert, vierter Band des „Kapitals"*, 3 Teil, 1962, S. 236.

（9）オウエンの「自叙伝」追録によれば、彼の「新社会観」に興味をもっていたF・プレイスが、書斎を整理してたまたまベラーズのパンフレットを見て、「私は大発見をしました。――あなたの社会観を一世紀半も前に論じている著作の」とオウエンに知らせた。オウエンはそれを貰い、「千部刷ってそれを配ろう。そして自分はそのアイディアを始めて生みだした名誉をこの著者に与えよう。もっとも私のは、諸事実を観察しそれらを反省し、それらが毎日のくらしの仕事にどんなに役立つものかを試すことを実際にやってみて、考えざるをえぬようになったのではあったけれども。」（*The Life of Robert Owen, written by himself*, vol. I, 1857, reprinted with an introduction by M. Beer, p. 331. 五島茂訳四一八ページ。）と述べて、事実これを一八一七年の大公開集会の記事を書いた印刷物と共に配ったのである。そして宗教を否定したこの有名な大集会において、協同化を提案し、「この協同化の方法は、一二〇年前にジョン・ベラーズによって示唆された実際的計画に一致し、最も健全な経済学の原理と全く調和するものであります」（R. Owen, *Address Delivered at the City of London Tavern on Thursday, August 21st*, in *A New View of Society and Other writings by Robert Owen*, p. 213. 渡辺訳九五ページ）といっている。

マルクスによって「経済学史上における真の奇蹟」と讃えられたベラーズは、社会事業に献身したクエーカーで、その *Proposals for Raising a College of Industry of all useful Trades and Husbandry, with Profit for the Rich, a plentiful Living for the Poor and a good Education for Youth, which will be Advantage to the Government by the Increase of the People and their Riches*, 1695. において、労働者およびその家族を収容する産業学校を提案、富者がこれを経営して人びとに適当な教育と生活環境を与え、企業利益は彼らの生活向上にあてられることを期待した。マルクスの評価は、彼の労働価値説、貨幣論、協業の利益の主張、労働日の規制の主張、分業の批判、貧富の対立など、一七世紀の末にすでにマニュファクチュア時代の資本主義の諸矛盾を洞察していたことにある。これらの洞察、および協同組合企業の提案、協同による費用の節減、農業と工業の結合、教育の重視、教育と労働の結合、児童中心の教育、労働による価値尺度などは、確かにオウエンの先駆者であるが、ベラーズの産業学校は、組合企業の剰余は資本の利益として出資者に配当されるのであって、富者の利益を強調し、オウエンの共産主義には到達していない。従って、協同組合主義としては疑いもなくベラーズはオウエンの先駆者であっても、オウエンの窮極のヴィジョンはゴドウィンに近いというのが私の考えである。オウエンがベラーズを発見したのは、すでに彼が共産主義者に転身する決意を固めた後であったろう。

（10）「ゴドウィンの思想を拡めるための、多分最も重要な実行者はロバート・オウエンであった。オウエンは、ゴドウィンの名前がすでに忘却の中に沈んでしまった時にこの哲学者に会い、彼らの個人的な交渉は僅かなものであったようだ。だが彼は、ゴドウィンの諸著作の熱心な読者で、人類の更生のための彼自身の計画がそれに負っていることは明らかである。

オウエンは、富者たちは徳の必要をさとるように変えられることができ、その故に暴力革命や政治的煽動は不必要であるというゴドウィンの論点を示すべく努力した。彼自身、貧困から身を起した富裕な製造業者で、人びとの教育に努力することによって全体の福祉のために彼の富を用いることに着手した。すなわち、人びとが自発的に政府と財産を棄て、そして人種や国家の境界を知らぬ有益な交際や協同によって結びついた小さな自治社会に住むことを選ぶような精神状態に教育しようと努力したのである。彼がその教説を建てた基本的な思想は『政治的正義』から得られ、彼の生涯を通じて変らず存在した。それは、人間はその環境によって悪くなること、人間は罰によってではなく社会正義にもとづいた社会の建設によってのみ変革されること、そして世界のたいていの悲惨や害悪は、悪い制度のためであり、人びとが自由平等の条件下に合理的に教育されるなら、容易にとり除かれるだろうということである。

オウエンは彼自身の工場を、彼の労働者たちに正しい条件を与えるべく改革することによって始めた。彼が、物質的な事柄において協同の必要を認めることによってゴドウィニズムの修正を学んだのは、実にここにおける彼の経験からである。オウエンの協同理論は、ずっと後になって、クロポトキンとエリゼ・ルクリュスによって進められた無政府共産主義において、個人の自由に関するゴドウィンの主張を補うものとなった。

オウエンは、ゴドウィンのように、政治手段の遠慮のない批判者であった。それが達成される数年前に、議会改革は貧者に利益をもたらさないだろうということを彼は予言した。この態度によって、政治的に考える自由主義者たちの支持を彼は失った。彼らにとって、彼の思想は単に反動的に思えたのである。だが彼は、真の革命は政府の形態よりは人間関係の中になければならぬ、政治的よりは経済的でなければならぬ、ただ教育と環境の変化によってのみ人は自由とされうるということを主張し続けた。教育は『少くともわれわれの活動に依存するかぎり、この世に存在するすべての善と悪・悲惨と幸福の第一の源泉である』というオウエンの言葉以上に、ゴドウィンの思想に近いものはありえないだろう。……

どのような仕事に彼が従っている時でも、協同組合、労働組合、交換銀行あるいは彼の不運な協同村にある時でも、彼はゴドウィンに

よって予見されたところと似た自由な社会のヴィジョンを常にもっていた。そして彼が奨励した運動は、この大目的の手段に過ぎないように思える。」G. Woodcock, *op. cit.*, pp. 248—250. 拙論の内容は、ウドコックのこの指摘に示唆されて生まれた。ただし、オウエンは貧困から身を起こしたのではなく、前述（五八巻二号）のように、両者の環境論および教育論には相違がある。

(11) (12) F. Engels, *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*, vierte unveränderte Auflage, 1894, S. 16.

(13) 協同の村というオウエンの計画に対する経済学者の態度として、たとえば R. Torrens は、オウエンのシティ・オヴ・ロンドン・タヴァーン第一回の集会にリカードゥなどと共に出席し、マルサスの人口論の立場から、理想社会の人口過剰を理由に反論を加えた。リカードゥもこれに同調し、コウルリッジと共に例の Pantisocracy を建設しようとしたサウジィを、オウエンと同列において、経済学を知らない空論家とみなしている。(Cf. *Letters of Ricardo to Trower*, in *The Works and Correspondens of D. Ricardo*, vol. VII, pp. 177, 247.) リカードゥは、一八一九年オウエンの計画を研究する委員会に不承不承参加したが、オウエンに対するリカードゥの批判は、人口問題、土地の生産力増大に対する疑問、利己心を否定した時の生産力増大に対する疑問などで、ブルジョア経済学の諸原理とあいいれぬオウエンの計画は、社会に無限の害悪をもたらすと考えていた。(*Ibid.*, p. 46.) トレンズのオウエン批判は有名で、オウエンの鋤耕作の提案は地力を増さず純生産物を減少させる、協同村の生産物は自給自足か外部との商取引をするのか不明であり、その財を海外へ輸出するなら市場の変動の影響を受けねばならぬし、自給自足をするなら、分業の利益を棄てて生産力は増大しない、という点である。そして機械の使用が過剰生産をもたらすというオウエンの考えに対しては、セー法則をもって反論した。(R. Torrens, *Mr. Owen's Plans for relieving the National Distress*, in the *Edinburgh Review*, Oct. 1819. Cf. L. Robbins, *Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics*, 1958, *Bibliographical Appendix*.) リカードゥはこの論文に満足の意を表している。彼はオウエンの博愛心を賞讃し、その人格を尊敬していたが、ニュー・ラナーク工場での労働者への廉売制度を有益なものと述べただけで、オウエンの計画には全面的に対立していた。（以上の点については、堀経夫「オウエンの『計画』に対するリカアドウの批判」「経済学論究」一七巻二号、一九六三年七月参照。）ゴドウィンの理性的功利主義を受けつぎ、全体の利益を強調するオウエンと、ベンサム主義によるブルジョア経済学との断層に注目せられたい。リカードゥに対するオウエンの反論については、特に松田弘三「オーウェン対リカードゥ――『オーウェンの労働階級救済のための、経済学の原理にもとづく、彼の提案する社会構成についての、リカードゥあての公開書簡』一八一九年を中心として――」（「岸本博士還暦記念論文集」所収）を参照。

（以上の内容は、九月二四日、関東学院大学において開催された経済学史学会関東部会大会において発表された。）

ルソー「社会契約論」の理論構造と資本主義（上）

野地洋行

目次

序章　基本性格
第一章　ルソーの方法――自然および人間
第二章　「社会契約論」の理論構造
第三章　「社会契約論」と商品社会の論理――（以上本稿）
第四章　ルソーにおける「反」資本主義の論理――（以下次稿）
第五章　土地所有権をめぐるルソーの反封建制と「反」資本主義
第六章　ルソーと分割地農民の存在構造
終章　ケネー、ディドロ、ルソー

序章　基本性格

ルソーの思想の本質がロマンチシズムであるか、あるいは合理主義であるのか、[1] という古典的な問題設定は、ルソーが全体主義の源流かあるいはリベラリスト[2][3]なのか、という、政治的[4]問題設定とかなり重なりあいながら論じられてきた。